

新潟教育研究所

令和2年3月10日発行 第43号

公益財団法人 新潟教育会
新潟教育研究所

〒951-8104

新潟市中央区西大畑町590-3 新潟教育会館
URL <http://kyouikukai.jp>

TEL・FAX 025-222-2971
E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

PDCAを使いこなす

新潟医療福祉大学 教授

脇野 哲郎



私の専門である体育・スポーツ経営学は、マネジメント理論を体育・スポーツの分野に応用しようとするものです。32年前に作成した私の修士論文の内容は「PDCA体育授業分析法の開発」でした。その後10年以上に渡り、試行錯誤を繰り返した者として、持論を少し紹介します。

1 PDCAはサイクル活動である

サイクル活動は繰り返すという意味です。年1回だけ行うことは、その本質ではありません。PDCAの評価を高めたのは日本の工業生産分野での成功です。小集団ごとに短い周期でPDCA活動を繰り返し、世界に誇る高い品質管理を成し遂げたのです。

ポイントは、何とんでも社員のやり甲斐の向上です。主体的に取り組むことで成就感、達成感が得られ、それが仕事への意欲につながり、成果が上がるという正のサイクルが成立したのです。

これは、「給与や報酬も大事であるが、それ以上に人の勤労意欲を高めるのは、やり甲斐である」という理論に基づきます。内発的動機付けを重視する授業で目指す子どもの姿と共通点があります。

2 PDSとPDCAの違いは？

PDSは古くからある基本かつ重要な理論です。SはSeeですから、Checkとほぼ同じ意味です。PDCAとの大きな違いはAがないことです。「すぐに改善する」がAの価値です。サイクルの周期を短くし、企業等では月1回程度のペースで行われることが多いです。「素早局的に改善す

る」ことが求められます。逆に、年に1回程度行うだけならPDSで十分であると言えます。

したがって、PDCAを何にでも使うのではなく、重点とする内容であり、かつ、繰り返し行えることに限定すべきです。何にでも使おうとすると、形式だけ当てはめてしまう恐れがあります。

3 Cの質が問われる

私の研究で、PDCAの中で特に重要であるとされたのはCの質です。Cの質が低いと、当然、Aがあいまいになり、その結果、次のPの質も落ちます。Cの精度を高める必要があります。

学校では、子どものアンケート等を活用する場合がありますが、これだけでは質の確保は厳しいです。子どもが自己評価する事自体に大きな意味がありますし、メタ認知にもつながります。しかし、子どもの自己評価だけでは、Cの質は確保できません。信頼性が高くないからです。自己評価が実際よりも高い子ども、逆に、自分に厳しく自己評価が低い子どもが必ずいます。時間と労力をかけずに行える客観的な評価も必要です。

どうすればよい？まず、現在得られるデータや事実の中から目標に正対し、信頼性が最も高いものを絞り込みます。また、職員の行動、例えば運営方法、回数、進み具合等が適正かどうか確認できる自校に合った手法を工夫することです。

形式的なPDCAは、学校の経営資源を無駄にし、働き方改革を逆行させます。今こそ、PDCAの本質を確認し、活用する場面や内容の厳選とP、C、Aの質を高める一工夫が必要です。

※「PDCA体育授業分析法」の詳細は、新潟大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要10号（p33～51）、11号（p27～46）でもご覧いただけます。

今、大事にしたい連携の心

新潟教育研究所 教育アドバイザー

小田 智美



はじめに

子供を取り巻く環境や学校が抱える課題の複雑化・多様化。学校と地域の連携・協働の重要性が今まさに指摘されている。学校と地域・保護者とが連携して子供を育てていくためにどんなことを大事にしたらよいのだろうか。

1 人と人がつながるということ

まず私が大事にしていることは、地域の懐に入り、地域を知り、地域の人と顔を合わせることである。子供は地域の中で成長している。その地域を知り、地域の良さを感じ、地域の人と知り合うことは価値あることだと考える。特に管理職の方には遠慮せずに地域に足を運び、子供や職員に愛着を持って地域を語っていただきたい。学校や地域によっては、教職員が地域を知り、住民と触れ合う機会をつくっているところもある。このような体験が、教育活動の様々な場面で生きてくると思われるのでヒントにされてはいかがだろう。

人と人がつながり、活動と活動がつながる。学校と地域・保護者が連携して取り組むには、仕組み等も大事であるが、心の距離が縮まり、「一緒に」と感じてくれることこそ基盤であると思っている。

2 目指す方向を同じにすること

村上市では、平成20年の合併以来、学校支援本部事業をベースに「地域の子供を地域のみんなで育てる教育活動」を推進してきた。質の高いコーディネーターとの出会いもまた、地域に足を運ぶことで生まれた。そして、コーディネーターが学校と地域を結び、例えば中学生が防災等地域課題について住民と解決法を探るなどの活動も行われている。地域の一員として誇りを持つ子供が育っていると感じる。現在、コミュニティ・スクールを段階的に導入している。今までの財産を生かしながら、少しずつ成熟させていきたいものである。

先日、次年度から導入する中学校区で地域住民

と学校職員による話し合いが行われた。どんな子供に育ってほしいのか、思いを共有し、各校に持ち帰った。次は学校運営協議会の場で、校長の基本方針の承認を通して目標やビジョンを共有し、課題は何か、何ができるか等を協議することであろう。熟議と気負わず、いろいろな形で、参加者もその時々に応じて話し合ってはどうか。どのような形であっても顔を合わせ、対話していくことは大事にしたいものである。何をして、何をしないのか。何を重視し、何に時間をかけるのか等も含め、参画と共有をしっかりと確保し、目指すべき方向を同じに取り組むことを大事にしたい。

3 次代につながる活動を

以前、学校と地域がお互いにニーズや思いを共有し、できることなどを話し合ったことがある。学校のこと、地域のこと、案外分からないことが多いことも分かった。では、地域の子供を地域の人みんなで育てるには何が大事なのか。地域に愛着と誇りを持って語れる子を育てるにはどうすればよいのか。地域力はどのように豊かにしていくのか。地域と連携し、3年かけた協議は1年ごとにレベルアップし、中学生の参画で連携の幅も広がった。3年目、地域のお宝マップを作成した。付箋を貼り、地域の大人と話し合い、大学生と話し合ったことは中学生の宝物となり、人とつながり何かを成すことの素晴らしさを味わったことだろう。次代につながる活動を組み入れていきたい。

終わりに

地域・保護者と連携する上で私自身が大事にしてきたこと、していることを述べさせていただいた。地域・保護者との連携の真ん中には常に子供の姿がある。どのような時代にあっても大事にしたいことの中心は変わらないと思っている。最後に心がけていることを一つ——「信頼されることは信頼することから」。

繋ぐ・支える・輝く (輝くの巻)

新潟教育研究所 研究員

宮川由美子



はじめに

温泉旅館の宿泊代がかなりお得になる福袋を、年始めに買い求めるのが、このところの年明けの習いである。その宿泊予約が、電話やフロント対応だと有料(300円)になり戸惑っている。インターネットでの予約(無料)が基本だという。購入時にその旨何度も念押しされ不承不承領いたが、内心納得できていない私である。

1 本当の地域貢献を示してくれているY先生

講師経験を重ね、小学校の新採用としてスタートしたY先生。中学校音楽が主免なので、ピアノ演奏や歌唱指導はお手のもの。音楽好きの当時のPTA会長さんから協力を求められ、地域で催される「ふれあい音楽会」の支援者として活動していた。障がいのある人たちが創った詞に支援者が旋律を付け発表するという音楽会で、私も年に1回のそのステージを楽しみにしている一人である。詞に余計な飾りが無いからだろうか、清々しい感性が伝わってくる。Y先生は、どれくらいの数の詞に旋律を付けたことだろう。地元住民ではないのに、新採用として勤務したご縁を大切にしてくれているY先生。この音楽会ではなくてはならない存在となった。

今年は、かつての同僚をギタリストとして引っ張ってきて、会場の笑いを誘う楽しいステージを繰り広げていた。人々が殊更目指す地域貢献だけではなく、このような草の根的な地域貢献に目を向けてくれたら、Y先生のような人たちが、もっともっと輝くに違いない。

2 思いがけない選択を迫られたH先生

H先生も講師経験を経た上での新採用だった。保護者や地域からの信頼度と言ったら校内ピカー。何より児童一人一人への愛情が校内ピカー。それ故、勤務5年目には6年生の学年主任という分掌も担った。当人も校長も戸惑ったのは、次の任地での担当研究教科だった。「国語」を極めていく

はずだった(?)のに、「図画工作」という話が舞い込んだのである。「スイミーは考えた。うんと考えた。」H先生を思い出す度に、このくだりが必ず頭に浮かぶ。うんと考えたH先生は「図画工作」を選択して異動した。私は、その次の任地では「国語」に戻るだろうと思っていたが……。ある時、H先生の「図画工作」の研究授業を参観した。児童と汗を流しながら取り組む姿は変わらない。ただ、題材そのものや題材の解釈、題材と児童との繋がり、題材の着地点等に、どこか「近未来的なもの」を感じた。この時、これからの「図画工作」を開拓し始めているH先生の輝きを見た。

3 中学校か小学校かなんて問題ではない

中学校志望だったが、小学校教員として活躍している二人の若者がいる。一人は産休代替の講師だったT先生。もう一人は教育委員会の臨時職員だったS先生。T先生は専門が数学のせい何か何事も理路整然。児童に向かっても丁寧な口調できちんと話すので、高学年の担任として最適。S先生は私と生徒指導に携わった経験の持ち主で、とにかく聞き上手。忽ち児童の目線になってしまう特技あり。二人とも最初の目標とは違ったが、私から見れば「水を得た魚」。「子どもと共にあること」に教員のあるべき姿を見いだした彼らは、偶然にも同じ小学校に新採用の先輩・後輩として勤務している。思いもかけなかった自分の中の一つの側面を輝かせることができたことが、幸せでなく何であらう。

おわりに

老母が探していた「アルミのお玉」をある個人商店で発見。2種類あり、どう違うのかと問うと質が違うと言う。良い方は、もうメーカーが作っておらず最後の1本ということだ。「質の悪い方は却って値段が高くて、本当は売りたいんだよ。」と主人は言った。店先での立ち話に何故か人間味を感じ、ほっこりほっこり。



現在、私はスクールカウンセラーとして小・中・特別支援学校を訪問している。津川小学校を訪問した折、武藤校長から研修依頼があった。介助員は特別支援について学ぶ機会がない。研修を通して自信をもって子どもの支援ができるようにしてほしいという趣旨だった。そこで先日、研修会を行った。

今回の研修のゴールは、介助員が特別支援教育の見方や考え方を学び、それをもとに支援を要する児童に自信をもって対応できることとした。

最初に、どのような子どもに育てていけばよいか考えてもらった。教育基本法第一条教育の目的に「平和で民主的な国家及び社会の形成者の育成」とあるように、民主的な社会を形成できる「思いやりのある子ども」に育てることが大切であると指摘した。

子どもを取り巻く状況は、家庭においては虐待や親の離婚、学校ではいじめや不登校など課題が多く、子どもが育ちにくいのが現実である。子どもが育つために必要なことは、「人間関係を育てる場」と「育ちを支えるサポート」である。それができる場こそ学校である。子どもの中には、発達上の課題を抱える子どももいる。発達障害に関する知識をもつことも必要である。発達障害は脳機能障害であり、その

特性を紹介した。1つ目は社会的状況の読み取りが苦手で、集団の中で社会性のない言動をすること。

2つ目は集団行動の著しい困難があり、教室や集団に入りたがらないこと。3つ目に思いやりのない言動をしまい、友人をつくりにくいことである。これからの介助員に求められることは、次の教育観の転換である。第1に「百点満点を目指さない」こと。定型発達児童から定形外発達児童を見るのではなく、課題を抱える子どもの困り感に寄り添い、定型外発達児童から物事を見ること。第2に「合理的配慮の理解と実践」である。合理的配慮とは、書く代わりに言ってあげたり、必要に応じて休憩を取らせたりすることで、平等に環境や条件の調整をすることである。第3に教育の最終的な目的は「子どもの自立」であること。その子なりに学習できるようにし、集団から学べるように配慮したい。

研修後、参加者から、「対応の難しい子がいる。具体的な事例をもっと聞きたい。」という切実な感想が寄せられた。大切なことは、今後も特別支援教育について研修することである。そして、その学びを生かし、課題を抱える子ども一人一人の困り感に寄り添い、心を育てていくことが求められている。

教育アドバイザーを要請して

阿賀町立津川小学校 長谷川 真理



児童の問題行動に対して、どのような支援をすればよいか、悩んだり迷ったりすることが多くあり、教育アドバイザーの小林勉先生をお招きしました。

研修会では、支援を要する児童の特性の理解や対応の仕方、発達障害への合理的配慮等についてご指導いただきました。小林先生が関わった事例からも参考になる具体的な助言をいただきました。一人一人の児童の困り感に寄り添い、その子なりの学びが成立するような対応の仕方を工夫しなければならない、と強く感じた研修でした。

アンケートに基づく「第8回 調査研究報告書」の発行は、都合により6月になります。